

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 11 日現在

機関番号：30108

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24652129

研究課題名(和文) 小学校英語活動のための日本語力育成：相乗効果を目指すカリキュラムの構築に向けて

研究課題名(英文) Developing Japanese proficiency for young language learners in Japan

## 研究代表者

三浦 寛子 (MIURA, HIROKO)

北海道科学大学・保健医療学部・准教授

研究者番号：60347755

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は学生の日本語力と英語力の関係を調べたものである。学生には、日本語と英語で自己紹介を書かせた。この他にも、大学生生活1年目の思い出について英語で書く課題を与えた。また、日本語と英語の学習方法や意欲について調べるために、アンケート調査を実施した。その結果、母語で書くことを苦手とする学生は、英語でも抵抗を感じる傾向があることがわかった。また、漢字や単語を覚える学習方法や、それらのテストに臨む意欲、読めない漢字や知らない英単語の対処の方法などに共通点があることがわかった。しかし日本語と比べ、英語で課題に取り組む際には、構成を考えずに思いついたこと、書けることから書く傾向が強くなることもわかった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to investigate similarities between the learning styles of students' learning both Japanese and English. Data used included a self-introduction written in the two languages, an essay about the student's school lives in English, and questionnaires about their favorite language learning styles and motivation. The data was processed using cross tabulation. Results showed that letter totals used for both self-introductions in Japanese and in English have a positive correlation. Other common tendencies between learning styles of the two languages included test taking motivation and new or unfamiliar word learning methods. On the contrary, the results also show that students have a stronger tendency to start writing in English without devising structure for their essays when compared to writing in Japanese. A possible reason could be due to their comparably low proficiency of English writing when compared to Japanese writing.

研究分野：ESP、小学校英語

キーワード：日本語力と英語力 ライティング

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 2006年の文化審議会答申において、これからの時代には国語の能力を伸ばさなければならぬことが述べられた。外国語の運用能力は国語の運用能力の上に成り立っているとも記されており、国語力の土台を作ることが、外国語の力の伸長につながる事が明記された。

当時の日本は小学校英語の是非について熱い議論が繰り広げられていた時代であり、鳥飼(2006)や大津(2009)などの小学校英語反対論者たちは、英語の前に国語力を育成すべきであると主張した。

国語力・日本語力と外国語力・英語力に関する研究は、着実に進められている。しかし、日本語力と英語力を比較する研究は、米崎・楳田(2006)のように国語科と外国語科(英語)が連携したものを除くと、特定の語彙の使用パターンに着目したものが多く、

(2) 2013年度には量的、及び質的研究を試みて、2つの仮説を立てた。筆者が勤務する大学生を対象に研究を進め、大学生に日本語と英語で自己紹介文を書かせて比較した。2つの研究仮説とは以下の通りである。

研究仮説1「日本語で量的に書ける学生は、英語でも書ける傾向にあり、日本語で書けない学生は英語でも書くことができない」

研究仮説2「母語で文章構成に問題のない学生は、英語でも問題はない。日本語でも問題を抱えている学生は、英語でも同じような問題が見られる」

その結果、仮説1に関しては、日本語で量的に書くことができる学生は英語でも書けるとは言えないが、日本語で書けない学生は英語でも書くことができないことがわかった。

また仮説2に関しては、日本語で書いたときに話の流れがスムーズではなかったり、一文が長かったり、誤字脱字が多かった学生は、日本語でもミスが目立った。しかし、日本語で正しい文章で構成も整った自己紹介文を書いた学生でも英語ではミスが多く見られることがあることが証明された。

これらは学生の「書きたいこと」と「書けること」の間にギャップがあることに起因すると思われる。

この研究から、以下のような課題が見えた。1つ目は、ある程度英語力のある学生を対象としなければ、上記で述べたようなギャップを縮めることができないということである。また2つ目は、課題を授業外で取り組ませたために、公平性を欠いた可能性があることである。

## 2. 研究の目的

本研究は母語である日本語と英語で実際

に書かれたものを比較し、量的、及び、質的に何が言えるかを見出すものである。

## 3. 研究の方法

### (1) 研究対象者について

本研究の対象学生は筆者が勤務する大学の新生のうち、入学時に実施したプレテストの結果により、Advanced Classに振り分けられた保健医療学部の学生である。

本学での英語の授業は学部ごとに、Primary、Intermediate、Advancedにレベル分けをして展開している。受講学生数の関係で、工学部5学科は3学科と2学科、未来デザイン学部は2学科、保健医療学部5学科は3学科と2学科に組み合わせている。1年前期、後期、2年前期までの計3単位が必修科目であり、原則としてその1年半は同じ教員が担当する。レベルごとに共通したシラバスを用いており、教材は同じものを使用し、中間、期末試験も同じものを使っている。

保健医療学部はプレテストの結果から、IntermediateクラスとAdvancedクラスのみ展開している。保健医療学部の3学科(診療放射線学科、義肢装具学科、理学療法学科)にはAdvanced Classが2クラスあり、各37名と36名が受講している。同様に、2学科(看護学科、臨床工学科)にもAdvanced Classが2クラスあり、各42名と43名が受講している。

本研究では、保健医療学部のAdvanced Classを受講した1年生のうち、4つの研究データ全てが存在する126人を対象とする。4つのデータとは、日本語での自己紹介文、英語での自己紹介文、英語で書かせた大学1年目の思い出、日本語と英語に関するアンケート調査である。

### (2) 研究方法について

本研究で用いたデータは、上記で述べたように4つである。全てのデータは、授業中に学生が直筆で取り組んだ。課題に関する事前予告はしていない。

#### 日本語での自己紹介文について

クラス分けされた初回の授業において、授業のガイダンスを実施した後に日本語での自己紹介文を30分で書く課題を課した。携帯電話の辞書機能、電子辞書、インターネット検索も含めて、辞書の使用は全て認めなかった。片面にA4サイズの400字詰め原稿用紙2枚分をA3に両面印刷したものを配布し、課題の提示から提出まで全て授業の中で行った。

#### 英語での自己紹介文について

日本語で自己紹介を書かせた翌週の授業において、英語でも自己紹介を書くよう指示した。ただし、日本語で書いた内容にこだわる必要は無いことを伝え、30分で取り組ませた。英語での自己紹介文は、辞書の使用を認

めない代わりに読み手が理解できる程度のスペルミスは大目に見ることとした。これは公平性を期すためであり、自信の無さから書くことをやめてしまうことがないように配慮したものである。A4サイズの用紙に罫線を引いたものを両面印刷し、学生に配布した。

#### 英語で書かせた大学1年目の思い出

昨年の新入生が進級して2年生になって初回の英語の授業で、大学1年目の思い出を英語で書かせる課題に取り組みさせた。時間は40分で、授業の中で実施し、回収した。英語での自己紹介文を書かせた時と同じように、辞書の使用は認めなかった。

#### 国語学習と英語学習に関するアンケート調査

学生には国語学習と英語学習に関するアンケートに回答してもらった。アンケートは全て日本語で書いてあり、選択肢の中から自分の気持ちに近いものを選んで回答させた。この調査は他の課題と比較検討するために実施したため、他の目的には利用しないことを約束し、学生番号を記入させた。

#### 4. 研究成果

##### (1) 英単語数と日本語の文字数の相関

どちらも30分で書かせた、日本語の自己紹介文の文字数と英語での自己紹介文の使用単語数を比較した。

その結果、図1にあるように、Advancedクラスの学生が自己紹介文で使った日本語の文字数と英単語数には相関関係があることがわかった。

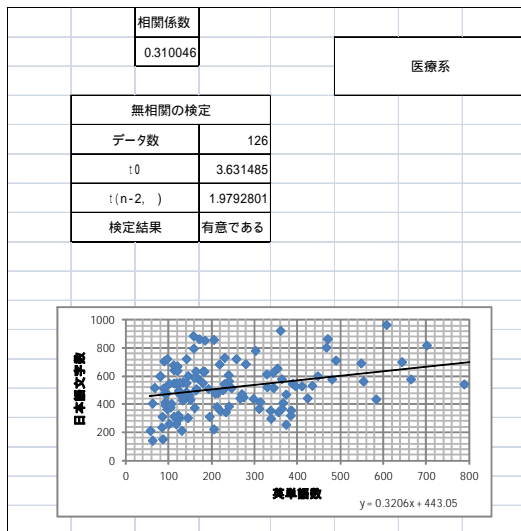


図1 英単語数と日本語の文字数の相関

##### (2) アンケート結果と日本語の文字数

漢字テストに取り組む際に、紙に書いて覚えると回答した学生は106名で、見て覚える学生は20名であった。漢字を書いて覚える学生が日本語での自己紹介文に用いた文字数の平均は535.8文字であった。一方、見て覚えると回答した学生の平均文字数は、

439.1文字であった。

このことから、漢字を紙に書いて覚える学生の方が、書く量が多いことがわかった。

アンケートに回答したり、ある程度まとまった量の文章を書くことに対する抵抗感と実際に学生が書いた文字数を比較した。その結果、図2からわかるとおり、書くことに対する抵抗感が少ない学生は、自己紹介においても多く書いていることが証明された。

設問	アンケートに回答するとき		まとまった量の作文をするとき	
	苦痛ではない・あまり苦痛ではない	やや苦痛である・苦痛である	苦痛ではない・あまり苦痛ではない	やや苦痛である・苦痛である
人数	90	36	88	37
平均文字数	543.7	482.6	537.9	482.6

図2 抵抗感と日本語の文字数

課題への取り組み方と文字数について比較した。何かを書くときに「大まかに内容を考えてから書く」と回答した学生は85人で、平均文字数は518.9文字だった。「頭に浮かんだことから書く」と回答した学生は37人で、平均文字数は482.6文字であり、予想に反して明らかな差は見られなかった。

漢字がわからないときの対処の仕方と文字数について比べた(図3を参照のこと)。

自分が書きたいときに漢字が思い出せない(知らない)ときには、大多数の学生が辞書で調べたり、別の言葉で言いたいことを表現しようとするのがわかった。これらの学生の自己紹介文での平均文字数は528.8文字であった。漢字がわからないときに平仮名で書いたり、その文を書くことをやめてしまうと回答した学生は7名で、379.1文字しか書いていない。

設問	書きたい漢字がわからないとき		読めない漢字があったとき	
	辞書などで調べる・別の表現を用いる	平仮名で書く・文を書くのをやめる	辞書などで調べる	調べない
人数	119	7	79	47
平均文字数	528.8	379.1	533.7	498.2

図3 漢字がわからないときの対処法と日本語の文字数

しかし、自分が何かを読んでいて、読めない単語があったとしても約63%の学生しか調べないこともわかった。調べる学生と調べない

い学生の平均文字数を比較したところ、自分が書くときに調べる学生と調べない学生の平均文字数の差ほど歴然とした違いは見られなかった。

### (3) アンケート結果と英語の単語数

英単語のテストに取り組む際に、紙に書いて覚えると回答した学生は114名で、英語での自己紹介文で実際に書いた英単語数は247.7語であった。見て覚えると回答した学生は、漢字を見て覚える学生よりも若干増えて12名いた。それらの学生は181.8語しか書いていない。

課題への取り組み方と単語数について比較した。英語で自己紹介を書く際に、大まかに内容を考えてから書くとは回答した学生は60名で、平均単語数は242.4語であった。頭に浮かんだことから書くとは回答した学生は、日本語で書くときよりも多い66名おり、平均単語数は240.5語であった。

日本語で自己紹介を書くときと比べて、英語では書けることから書く傾向が強くなるようだが、平均単語数に差は見られなかった。

英単語がわからないときの対処の仕方と単語数について比べた(図4を参照のこと)。

設問	書きたい単語のスペリングがわからないとき		知らない単語があったとき	
	辞書などで調べる・別の表現を用いる	平仮名で書く・文を書くのをやめる	辞書などで調べる	調べない
人数	123	3	98	28
平均文字数	242.4	201	237.7	254.6

図4 英単語がわからないときの対処法と単語数

まず気がつくことは、漢字がわからないときと比べて、英単語がわからない場合は調べる学生が増加していることである。外国語の場合は漢字のように推測することが難しいために、調べる傾向にあるのかもしれない。また、学生の間では電子辞書が普及しているために、辞書を引く手間が軽減されていることも考えられる。

### (4) その他

漢字テストへの意欲と学習方法について比較した。漢字テストで満点や8割を目指す学生は、テスト対策として紙に書いて覚えようとする傾向にあるという仮説をたてた。

満点や8割を目指す学生は128名おり、その内紙に書いて覚えると回答した学生は85%で、見て覚える学生は15%であった。そのため、今回の結果からは仮説は正しいと言える。

漢字テストと英単語テストに臨む際の意欲について比較した。

漢字テストで8割以上を目指す学生123人のうち、121名(98.4%)が英語でも8割以上を目指すとは回答した。一方、漢字テストで半分、またはそれ以下でもかまわないと回答した学生3名全員が、英単語のテストでも同じように点数にはこだわらないことがわかった。

漢字と英単語の学習方法について比較した。漢字を書いて覚えると回答した学生は106名おり、99%にあたる105名が英単語も書いて覚えると回答している。これは教科が変わっても学習のパターンがある程度できており、それに従っているということであろう。

一方、漢字を見て覚えると回答した20名は、英単語に関しては書いて覚える学生が9名、見て覚える学生が11名と分かれた。

英語で書いた自己紹介や大学生活1年目の思い出に関して、平均単語数以上書いている学生は、知らない英単語があった場合に調べる傾向にあると言えるのかを調査した。

その結果、どちらの課題に関しても単語を調べる学生の方が使用した単語数が多いとは言えないことがわかった。

アンケートで「英語でまとまった量の英文を書く際に下の方まで書く、または3分の2まで書こうとする」と回答した学生は、実際に英語の2つの課題に対して、平均単語数を上回る量の単語を使用したかを調べた。

	平均単語数以上		平均単語数以下	
	自己紹介	思い出	自己紹介	思い出
3/2以上書く	32	42	51	37
3/2を目指さない	13	10	30	30

図5 意欲と平均単語数

図5からわかるように、与えられたスペースの3分の2以上までは書くことを目指すと回答した学生のうち、実際に平均単語数以上を使って自己紹介を書いた学生は32人いた。この数は、実際に平均単語数を上回って書いた45名の71%にあたる。同様に、大学1年目の思い出を書くという課題に関しても、平均単語数以上を書いた52名のうちの81%である42人が3分の2以上書くことを目指した学生である。

ただし、書こうと思っけていても英語力や課題の難易度などにより、実際には書けないことがある。しかし、1つ目の課題より2つ目の課題の方が多く書ける学生が増えていることから、ライティングの力が伸びているこ

とも考えられる。

(5) 今後の課題

本研究の結果、課題に対する日本語の文字数と英語の単語数には相関があること、日本語と英語の学習パターンが似ていることなどがわかったが、それらを証明するには、さらに異なるライティングの課題が必要である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

三浦 寛子、「自己紹介文」の比較から見える日本語力と英語力 日本語力と英語力には関係があるのか、実用英語教育学会 SPELT Journal、査読有、Vol.3、2013、17-26

〔学会発表〕(計3件)

三浦 寛子・塚越 久美子・秋山 敏晴・坂部 俊行、日本語力と英語力の比較 日本語ができる子は英語もできる?!、第13回 小学校英語教育学会 全国大会、2013

三浦 寛子・塚越 久美子・坂部 俊行、文章表現から見える英語力と国語力 自己紹介文の比較から言えること、第39回 全国英語教育学会、2013

三浦 寛子、英語学習と国語学習に共通点はあるのか ライティングと語学学習アンケートからわかること、第41回 全国英語教育学会、2015

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三浦 寛子 (MIURA, Hiroko)  
北海道科学大学・保健医療学部 臨床工学科・准教授  
研究者番号：60347755

(2) 研究分担者

塚越 久美子 (TSUKAGOSHI, Kumiko)  
北海道科学大学・高等教育支援センター・准教授

研究者番号：00405656